

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

昭和大学病院プレストセンターでの研修を終えて

富山大学消化器・腫瘍・総合外科

関根 慎一

この度、日本臨床外科学会国内外科研修委員会の国内外科研修プログラムとして、2018年11月26日より12月6日までの間、昭和大学病院プレストセンターで研修させていただきました。

私が勤務している富山大学消化器・腫瘍・総合外科においても、乳癌患者数が増加しており、新規治療を含め研修する場を希望しているところに、今回の国内研修プログラムの存在を知りました。

昭和大学プレストセンターは、乳癌診療に関わる専門家が集結して高度な医療を実践している私たちの見本のような病院でした。しかし、その歴史は2010年と比較的浅く、中村清吾先生を中心としたスタッフの方々がどのように協力してチーム医療を実践しているのか、以前から非常に興味を持っておりました。手術はもちろんのこと、臨床試験や新規治療薬を含めた治療方針などを含めて勉強し、当院での診療に取り入れられることは積極的に持ち帰ろうと思ひ、研修を希望致しました。

研修でまず感じたのは、若手の先生方が、非常に自信を持って外来診療・病棟業務・手術・研究に携わっている点でした。施設面では、遺伝カウンセリングや形成外科外来などとの連携も緊密で、これらの多くのスタッフがプレストセンターのブース内に集結しておりました。その他、エコー・マンモグラフィ・マンモトームから患者さんの治療と生活をつなぐリボンズハウスまで完備されているまさに乳癌患者のための施設といった印象でありました。ハード面だけでなく、検討会においても術前段階での病理を含めたカンファレンス、エコーやMRIの読影を徹底した術前診断や術式選択、術後治療・化学療法の方針決定など、high volume centerというだけではない、患者さんに本当に何が必要なのかを真に議論している検討の場でありました。中村先生、明石先生をはじめとした乳癌外来もご一緒させていただきましたが、患者さんが世界中から受診されていることに驚きました。CD4/6 阻害薬やPARP阻害薬をはじめとした新規抗癌剤の使用状況や臨床試験や多施設共同試験の参加状況なども聞くことができ、今後の診療の参考になりました。遺伝性乳癌に関する相談、セカンドオピニオンをはじめとした専門外来では、治療法や癌に関しての訴えを、実際に患者さんの生の声として聞くことができ、非常に勉強になりました。手術日は、朝から遅くまで多くの症例に参加させていただきました。偶然ですが、研修中に明石定子准教授が、『プロフェッショナル 仕事の流儀』に出演され、直後に手術にも参加する機会に恵まれ、とても印象に残る時間を経験させていただきました。桑山医局長が中心に行っているSAVI (strut adjusted volume implant) を用いた乳房温存術後小線源治療の手術を含めた一連の流れも見学でき、非常に充実した研修となりました。研修期間中の土日も、12月1日に関東地方会があり、中部地方会とはまた違った雰囲気勉強になりました。12月2日にはプレストセンタークリスマス会も開催され、多くの患者さんが参加されて、スタッフの方々と楽しんでいる姿がとても印象的でした。

今回の研修では多くのことを学びました。富山大学では、消化器外科、乳腺科ともに診療に携わっており、乳癌診療を集中的に学ぶのは初めての経験であったのでとても刺激になりました。乳腺科として不足している点および個人としても目標とする点が明確になりました。東京と富山とでは乳癌患者の年齢層なども異なり、全てが当てはまるわけではありませんが、診療の選択肢を増やすことができ、私の大きな財産になりました。この経験を活かし、今後の富山大学および富山県の乳癌治療の発展に貢献していきたいと思ひます。応募後に聞いた話ですが、この制度で乳腺研修を行うのは私が初めてというこ

とで、今後も（私よりももっと若い先生方が）この国内研修制度を有効に活用することで、大学診療や地域医療の発展に繋がればよいと感じました。

以上、昭和大学病院プレストセンターでの国内研修について報告させていただきました。

中村教授、明石准教授、沢田准教授、桑山医局長をはじめ、お世話になった昭和大学の全ての方々に御礼申し上げます。また、今回この貴重な機会を与えていただいた日本臨床外科学会国内外研修委員会の皆様、ご推薦いただいた富山県支部長 富山大学消化器・腫瘍・総合外科 藤井 努教授、ご支援いただいた当科教室員の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。



2018年12月2日 プレストセンタークリスマス会にて